



八ガキの宇宙

平野文

子役を経て17歳(昭和47年)でラジオ番組を始めました。なにより反響が、八ガキという形になって返ってくることの楽しさを、教わっていききました。

すると今度は、深夜放送のDJもやってみたくて仕方なくなりまして。事務所に頼み、大卒後すぐに「走れ歌謡曲」のオーディションを受けました。番組は週に一度、深夜3時から2時間の生放送で、4年間つとめました。リスナーは受験生が圧倒的で、彼らから送られてくる4、5百枚もの八ガキ、そして内容、それはそれは、想像以上で嬉しいものでした。2時間をいくつかのコーナーに分けて、八ガキは各コーナーの、その週の題目別に送ってもらおうようにしていました。私も手紙好きです。八ガキやレターセットも、たとえ揃えては、あれこれ吟味しながら使っていました。ですから八ガキを

書くという行為、それも毎週、彼らがこの番組のために、どれほどの努力と時間を割いて、参加してくれてきているのか。身をもってわかるだけに、それらは本当にありがたいものだったのです。もちろん番組は、八ガキをくださる方々だけを対象に放送しているものではなく、けっしてありませんでした。

本番前にはいつも、7時間かけてすべての八ガキに目を通していました。ありがたいことにとどの八ガキも、紙面をフル活用。その題目に対しての文章をびっしり綴って番組に参加してきてくれているのです。それら手書きの文面は、どれも生きていた。そのうえ素直でやさしさに満ち、ウィットにも富んでいました。私なそこには及びもつかない、20歳前後の青少年の、その見事な発想と見立てには、毎週のことながら敬服で、私にはその八ガキが、掌サイズの小宇宙のようにさえ思っていたほどでした。

そうしたありがたい八ガキのおかげもあって、私はマイクの向こう側の世界で、無邪気な無防備に、しかも真面目に、毎週明け方までの2時間を、同じ視線で一緒になって愉しんでいました。が、片やリスナーはというと、いま思えば、もっと冷静でした。ラジオは声だけです。自

平野文(ひらのふみ) 1955年東京都生まれ、玉川大学文学部芸術学科演劇専攻卒業。78年深夜放送QR「走れ歌謡曲」のディスクジョッキーを担当、82年テレビアニメ「うる星やつら」のラムちゃん役で声優デビュー。アニメ・洋画の吹き替え、ナレーションの他レポーターとしても活躍。現在、『ビッグコミック』に「築地魚河岸嫁コメコラム」連載中。



ウイングド・ウィール 表参道にて

算はありませんでしたが、彼らはその声だけで、私を看破していたのでしょ。こちらが気付くことのない、辛辣的確なアドバイスを提案させ、さり気なく書き添えてくれていたのです。リスナーたちは有能なプロデューサーでもありません。いまでも真理だと思っています。たとえばその後、私がテレビアニメ「うる星やつら」で声優デビューを果たしたきっかけも、番組に届いた「文さん、アニメの声をやってみてはどうですか」と書かれた一通の八ガキでもあったのです。また興味深かったのは、差出人の名前というのは、八ガキに記された本人の手書き文字のまま、記憶されていくことでした。その名前の多くは、いまでもそのまま、鮮明に浮かんでくるのです。おそらくこの先も、記憶から消えることはないでしょう。メールやファックスもまだない、絵手紙さえブームになる以前の話しです。

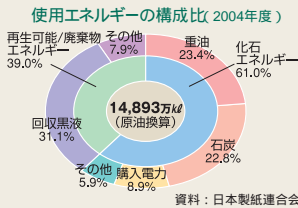
PAPER Q & A Vol.4

Q. 製紙産業では、廃棄物をどのように利用しているんですか?

A. 紙を作るためのエネルギーとして利用しています。

紙をつくるには、まず木材チップを細かく砕き、薬品で煮て、パルプ繊維を取り出します。その際、「黒液」という黒い色をした廃液が出ますが、実はこれ、繊維と繊維をつなぐ働きをしていた「リグニン」という木材の有機物が溶け出したものです。製紙には不要な黒液ですが、実は製紙産業にとっては非常に重要な副産物で、これだけで全使用エネルギーの約3分の1をまかなうことができます。この他、木くずやペーパースラック(有機性汚泥)といったバイオマス燃料と、廃タイヤ、RPF(再生困難な古紙と廃プラスチックからつくられる固形燃

料)などの廃棄物燃料を合わせて、約4割のエネルギーをまかっています。
*バイオマスとは、生物体(bio)により生成した有機性の物質資源(mass)で再生可能なもの。たとえば、植物、家畜の排泄物、生ゴミなどの有機物資源。



今回は9月7日号、達坂剛さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo: Shiro Miyake